

# 北海道師範塾 塾頭通信

## 「教師の道」

第981号 平成27年8月14日

### 昔話はなぜ、 お爺さんとお婆さんが主役なのか

「昔話はなぜ、お爺さんとお婆さんが主役なのか」という本は、非常に面白く読ませてもらいました。

この本を書かれたのは、古典エッセイストの大塚ひかりさんです。彼女は、膨大な古典を読み込み、「源氏の男はみんなサイテー」「カラダで感じる源氏物語」「本当はひどかった昔の日本」等多数の作品を世に問うています。

さて、昔話というと「昔々あるところにお爺さんは山に芝刈りに、お婆さんは川に洗濯に…」等と、お爺さんやお婆さんが主役級で登場する場面は大変多いのですが、私はその理由について、「昔も、お年寄りは結構存在感があったのかな」位で深く考えた事はありませんでした。しかし、大塚さんはこの問題にメスを入れて、昔々のお年寄り達が直面していた現実を、鋭く描き出しています。

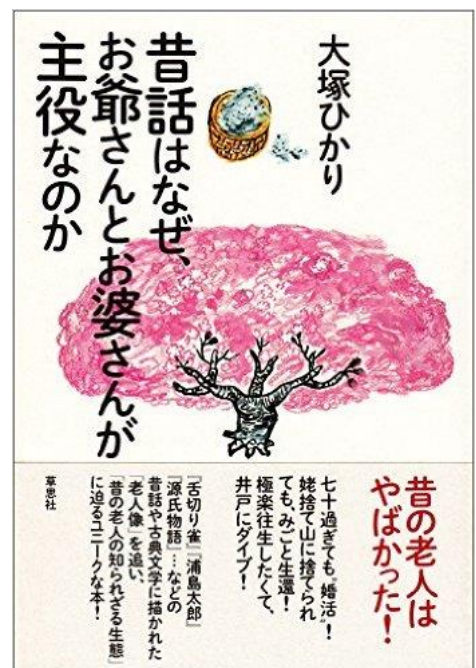
大塚さんは、昔話に登場する老人像について次のように分析しています。

- (1) 昔話では、子や孫のいない老人が大半
- (2) 昔話の老人はたいてい貧乏で、いつもあくせく働いている
- (3) 昔話の老人は、子や孫がいても捨てられる等の冷遇を受けている事が多い
- (4) 昔話の老人は「良い老人」と「隣の悪い老人」との過酷な生存競争に晒されている

そして大塚さんは、昔話の老人を見ていると、その特徴は「貧困と孤独と嫉妬」にあり、昔の老人の地位は低かったと総括しています。

こうした大塚さんの分析を見ていると、これは昔話の老人の話ではなく、現代の老人達の姿そのものではないかとさえ思えて来ます。

今日の社会状況に目を転ずれば、お金はたっぷり有り、優しい家族にも囲まれて幸せな老後を送っている人はほんの一握りです。むしろ、先日、新幹線で焼身自



殺した人のように、経済的な困窮や社会的な孤立の中でひっそりと暮らしているお年寄りの方が多いという現実があり、大塚さんが4つに整理した昔々の老人像は、今の老人像と重なって見えて仕方ありません。

社会保障制度が整備されていない社会においては、全ての人は生きていく限り働き続ける必要があります。従って、生産能力の落ちた（なくなった）老人の社会的地位は相対的に低くなり、姥捨て伝説のように山に捨てられるという事もあったに違いありません。

本の中では、こういう話しが紹介されています。

目の見えない婆が体についたしらみをかじっていると、嫁が「婆が餅米を盗んで噛んでいる。山に捨ててくれ」と息子に告げ口する。息子は婆を背負って山に捨てに行く。（以下略）

この話にはどんでん返しがあるのですが、婆は空腹で自分の体についたしらみまで食べるという悲惨な生活を強いられ、しかも自分の息子に背負われて山に捨てられるというのですから、これでもかこれでもかという酷さですが、かつての日本にはこんな事が現実であり、それが昔話として伝承されて来たのだらうと思います。

また、昔話では子のない老人や老夫婦、更には独居老人が沢山登場するのも、当時の社会が如何に貧しかったかを表しています。貧しさの故に、結婚が出来ない、また、子どもが欲しいけれども経済的な理由で産めないといった話は、昔話ではなく現代日本が抱えている大きな社会問題と符合するといえましょう。

こんな風に見て来ると、老人というのは社会から忌み嫌われる存在のようですが、勿論、老人の方だってしたたかで、そう簡単に消えて無くなる訳にはいきません。

貧しさや孤独、社会や家族の中での地位の低さ、社会のお荷物として冷たくあしらわれる存在の老人が、昔話では何故主役なのか、この疑問に大塚さんは次のように答えています。

昔の語り手達が昔話の主人公に「老人」を選んだのは、「社会的地位の低さ」と「長い人生に相応しい物語の存在」という2つの理由があるからだ。

「社会的地位の低さ」というのは逆説的ですが、地位が低いからこそ、「傘地藏」や「花咲爺」「舌切り雀」等のように逆転劇の面白さが際立つという事のように。

大塚さんは、底辺の老人が逆転劇を演じる事が出来た大きな要因は、長く生きた老人ならではの「知恵と知識」のせいと述べています。これはいい換えれば、老人であれば誰でも逆転劇を演じられる訳ではないという事でもあります。人は誰しも、生き残りのためには「知恵と知識」を働かせる必要があるというのは、昔も今も変わらない現実です。

長く生きれば生きた分だけ物語があるというのは、現代人にもいえることです。昔の写真を引っ張り出して見ると、その変化のさまに驚くばかりですが、その変化

が大きければ大きい程、物語性がアップするというものです。

「昔話はなぜ、お爺さんとお婆さんが主役なのか」を読みながら、これから自分は、老人としてどう生きて行こうか、改めて考えるきっかけをもらったような気がします。そして、残された人生、少しでも面白い物語を残せるよう、若い人に迷惑を掛けない程度に悪あがきを試みようかと思っています。

(塾頭 吉田洋一)